

敬

愛する知り合いのアメリカ人作家から来たメールに、次のような言葉が引用されていた。

「自分の故郷をいとおしむ者は、まだ未熟者である。どこの土地でも故郷だと思える者は、すでにひとかどの力ある人である。だが、全世界は異郷のようなものだとする人こそ完璧なのである」

作家によれば、これはサン・ヴィクトルのフーゴーという中世の哲学者の言葉だという。ぼくは作家にある質問をし、その答えの最後に、彼はこの言葉を書き添えてくれたのだ

旅の曲者

17

故郷と異郷のはざままで

文・写真／田中真知
Yamaku Naoki

イラスト／bozen

る。そこから飛び出し、世界のどこにあっても、そこを自分の故郷と思えてこそ、初めて力ある者となるのである。

ひっかかるのはそのあとだ。

「全世界は異郷のようなものだとする人こそ完璧なのである」

故郷だと思えた世界の一切が、逆に自分にとって異郷と感じられるとき、その人は真の意味で完成を見る、と哲学者の言葉は言う。しかし、そこに腑に落ちないものを感じる人もいるのではないだろうか。

ることはとてつもなく困難である。

むしろ、ある土地に長く住めば、その土地についての知識は増すかもしれないが、距離感や違和感もいっそう増していくというほうが真実に近い気がする。全世界を故郷だと思ふ感覚とは、自己の内に作られた観念世界についてのみ、言えることなのではないか。

そんな思いを巡らせていたとき、ケニアに10年以上暮らしている友人のことを、ふと思った。

彼女は長旅の末にアフリカにたどり着き、ケニア人の男性と結婚し、二人の子供にも恵まれ、現地の社会と密接にかかわりつつ、向こうに骨を埋めるつもりで暮らしている。毎年アフリカ文化を巡る講演やイベントのために来日し、現地のコミュニティ活動にも熱心な彼女は、実際に現地の文化や社会にとけ込んでいるように見えた。

そんな彼女に、この言葉はどんなふうに関くのだろうかと思ひ、ぼくは彼女へのメールにこの言葉を書き添えた。

ほどなくして、彼女から長いメールが来た。それは彼女の活動を外から見ていたぼくには思いもよらない

内容だった。

「引用の言葉、ものすごく胸に染みました」と彼女のメールは始まっていた。「アフリカのような独特な場所を旅していると、旅人の自分が、自分を取り巻いている環境からすれば、ものすごく異質と考えることがある。だから、旅は楽しくとも、常に漂う自分を意識しつづけているよ」

「それでも、アフリカへの愛着と強い興味があったから、自分は異質だと思いつつも、ここに根を張ってみたいとなった」。

そこで彼女は向こうで仕事を持ち、日本人とアフリカ人という立場の違いによる違和感を絶えず抱えつつも、イベントやネットワーク作りを通して、彼女なりの仕方であフリカとの関係を作っていった。

そして、あるとき「日本人・アフリカ人という枠を超えられたような自分を突然発見した」という。それは彼女にとって、自分が感じていたアフリカとの違和感を克服し、公私ともにようやく見出せた一体感や充実感の確認にほかならなかった。

彼女は書いていた。「面白くてたまらなくて有頂天になった。そこが自分のゴールなんだと、これこそ自分が求めていたポジションなんだと思ひ込んで有頂天になった。ついにこういう境地に到達したぜ、やつ

も新鮮に響いた。自分がおぼろげに感じていたことが、このシンプルな言い様の中に的確に表現されている気がした。

一方で、この言葉にはわかりにくいところもある。

「自分の故郷をいとおしむ者は、まだ未熟者である。どこの土地でも故郷だと思える者は、すでにひとかどの力ある人である」

ここまでなら、すんなり理解できる。一つとところに留まって、そこに執着しているのは未熟な状態であ



乾季の水場は草食動物にとって命の綱である。早朝には肉食獣の姿が見られる。南部アフリカ、ナミビアのエトーシャ国立公園にて

たね、とすら思っていた」。

ところが、一年くらい前から、いくつかの体験がきっかけとなって急にその一体感の中に戻れなくなってしまったという。「その一体感や共感というものが、薄っぺらな、虚構のものに思えはじめたのです、突然。なぜかははっきりとはわからないけれど、いろいろな出来事が連鎖反応的に連続して起こって、それによって自分の内部で何かが変化しはじめた（変化というか、ホントのことに気が付きはじめたというか）」。

そのきっかけについては触れないが、いずれにしても、彼女はふくれあがる違和感を抑えられなくなり、結果的に、それは彼女の今後の活動に大きな変更を強いることになった。そんな折、例の言葉を添えた多くのメールを受け取り、偶然の符合に驚いたというのだった。

彼女のメールはこう結ばれていた。「結局のところ、いちばん言いたかったことにはうまく結び付けられなかったけれど、（あの言葉は）」この世のすべてが異国の地『自分の場所

はどこにもない』と感じてしまう自分に、寂しさや切なさを感じなくともいいんだと思わせてくれた」

一つの言葉が、自分の生き方の中できちんと消化されるとはこういうことなのだろう。ぼくがこの言葉から受けた漠然とした印象をはるかに超えるものを、彼女のメールは伝えてくれた。

世界全体を異郷と思う感覚。それができる人が完璧かどうかは別として、日常生活をもふくめて、自己を取り囲む世界の一切が異郷に見える「とき」というのは、確かに存在する。しかし、そんなときぼくが感じるのは疎外感ではなく、むしろ存在という海のいちばん深い底にふれているような不思議に静かな感覚だ。

そして、そこから見つめる世界は、死の側から眺めるこの世界のように美しい輝きを帯びている。

異郷から故郷へ、そしてまた異郷へと、その風景を変えた彼女のアフリカ。そこで何が見えたのか。機会があれば、いつかまた彼女にきいてみたい。



田中真知

たなか まち

『プロフィール』1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に『アフリカ旅物語』（北東部編・中南部編、凱風社）『ある夜、ピラミッドで』（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、『惑星の暗号』（翔泳社）など。